

所属・資格 ドイツ文学科・教授

申請者氏名 初見 基

研究課題		ドイツ戦後思想の再検討
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究は、ドイツ戦後思想がその当初から現在にいたるまでどのような変遷をたどったかを社会思想史、言説史の枠組みで捉えるものである。本年度は昨年度からのつづきで、1945年の戦後まもなくドイツの内外で起きた、ナチ・ドイツの犯罪行為への「国民」の「責任」がいかに関与されたか、とりわけそれが「集団の罪」という語によってどのように問われたかを探った。そしてここに現今の「想起文化」に通ずる心性の一部がすでに形成されていた様相に光をあてることを試みた。
	研究の 結果	前年からの延長上で、今年度にあっては主として在米亡命者およびスイス知識人のあいだから起こった「集団の罪」を問う議論と、それに対するドイツからの反論を追い、そこに法的次元では扱えない、概念的には緻密ではない漠然とした「罪」の含意がある点を確認し、今後の作業を進めるうえでの端緒を掴んだ。これは日本独文学会シンポジウムの中で口頭発表した他、論文としてもまとめた。また戦後の心性を社会思想史の流れのなかで位置づける作業のなか、19世紀まで遡った検討も進めているが、その成果の一部を事典項目としてかたちにすることができた。
	研究の 考察・ 反省	2018年度においては、諸事情から研究時間を確保することがむずかしく、当初予定からかなり遅れをきたしている。これまでのところ、戦後間もない時期におけるキリスト教会ならびに右派における「集団の罪」の捉え方を十分に検討しきれていないので、次年度はその点を重点的に扱う。また徐々に時代を追い、1950年代西ドイツの保守的な土壌における議論、そして1960年代に「過去の克服」の言説がいかに関与してゆくか、これまでの研究の流れのなかに位置づけるかたちで研究を進めてゆく。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 日本独文学会春季研究発表会 「ナチズム克服の言説とその変容」(シンポジウム「戦後ドイツにおけるナチズム的言説の克服と復活」) 2019年5月27日/早稲田大学	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	「戦後ナチ批判言説のはじまりー「集団の罪」の追及と反撥」67-91頁 高田博行・山下仁編『断絶のコミュニケーション』 2019年3月28日刊行 ひつじ書房 事典内4項目「グリム兄弟」426-427頁、「ペシミズム」552-553頁、「バウハウス」566-567頁、「モダニズム」568-571頁 社会思想史学会(編)『社会思想史事典』(全888頁) 2019年1月31日 丸善出版	